

都督泥布

「都藝泥布」第89号をお届けします。9月28日、峰山地域公民館で開催した第65回地名フォーラムは、「丹波の文化を伝承する会」をはじめ、京丹後市のみなさまのご協力のおかげで盛会のうちに終了しました。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

さて、前号でもお知らせした会報のお届けの方法について、次回からも紙媒体でのお届けを希望される場合は 1 月末までに前号で同封したハガキなどでお知らせください。なお、今回は全会員に紙媒体で発送しました。

講演者 藤村 裕孝 氏

(丹波の文化を伝承する会 会長)

長年、丹後・丹波地域の歴史研究を継続されてきた藤村氏の講演は、丹後の古代史研究の基礎資料である「丹後風土記残欠」や籠神社社家に伝わる海部氏系図（「本系図」）・「勘注系図」共に

国宝）の問題点を整理し、近年（藤村裕孝氏）藤原・平城旧都他から出土した「木簡」資料との比較を通して、「丹後風土記残欠」や「勘注系図」の内容を批判的に検討するものであった。

和銅6年（713）に丹波国から分国された丹後国においても、同年に編纂が命じられた風土記は存在し、浦島伝説や羽衣伝説、天橋立伝承などが

京都地名研究会 会報 第89号

令和7年12月13日 発行

題字「つぎねふ」（山城の枕詞）

揮毫 吉田 金彦氏 (初代会長)

編集 京都地名研究会事務局

逸文として今日に伝えられている。これらとは別に問題の「丹後風土記残欠」は、本来の漢文ではない「被（られ）文体」が見られるなど多くの問題点があり、早くから偽書説が称えられていた。同様に「勘注系図」についても疑問点があることを藤村氏は指摘する。ただ、「本系図」に細かく注記を施した「勘注系図」は、江戸時代初期の写本であり、「本系図」解釈のための性格を考慮したうえでの附指定なのである。また、「丹後風土記残欠」記載の地名と考古資料としての荷札「木簡」記載の地名等の不整合についても、今後の発掘調査により新たな「地名」が確認できる可能性があり、地名の変遷と多様性を考慮する必要がある。

ただ、藤村氏の講演は、地元愛に溢れており、氏のような郷土史家がおられる丹後が羨ましい限りである。(中島 正 記)

(中島 正 記)

講演2 丹波と龜尾遺跡

講演者 岡林 峰夫 氏

（京丹後市教育委員会文化財保存活用課課長補佐）

現在、京丹後市の文化財保護行政の中核におられる岡林氏は、合併前の旧峰山町の文化財担当者である。氏の講演は地元峰山町「丹波」に所在し、自ら調査を担当した**つるお**尾遺跡の調査成果を中心に、



丹波の古代を立体的に描き出そうとするものであった。

現在も残る古代地名「丹波」は、「倭名類聚抄」に見える丹後国「丹波郡」七郷の一つで、「丹波郡」の中心であることに疑いない。しかも、和銅 6 年（713）に丹後国が丹波国から分国される以前から旧丹波国を中心であったと考えられている。ただ、古代の七道が整備される以前であっても、山陰道に属する丹波国において、丹波郡の位置は幹線から遠く離れており、やや不自然である。

靄尾遺跡の発掘調査では、「九九木簡」や「習書木簡」をはじめとする墨書き土器などの文字資料や、斎串や人形代などの祭祀具が出土しており、この遺跡が奈良時代の「郡衙」などの公的施設であることは、同様の他遺跡での出土例からみても、ほぼ誤りない。ただし、調査面積が狭く、今後の継続的な広範囲の確認調査が期待される。靄尾遺跡周辺には小字として「三宅」地名が残るもの、地名からその実態に迫ることは難しそうである。やはり、考古学的な調査が必要である。

岡林氏のような有能な文化財担当者がいる京丹後市の努力に期待したい。（中島 正記）

講演3 古代丹波と網野銚子山古墳

講演者 三浦 到 氏

（京丹後市史跡整備検討委員会 会長）

丹後の古墳や文化財の研究を長年積み重ねてこられた三浦氏のライフワークの一つでもある「銚子山古墳はなぜここに造られたのか」という課題に対する氏の結論的なお話を伺うことが出来た。



(三浦 到氏)

よく知られているように、網野銚子山古墳は墳丘長が201mもある日本海側最大の前方後円墳で

あり、墳長部で良好な葺石が見つかるなど、貴重な発見が続いている。また史跡公園としての整備も着々と進められている。

私どもの素人考えでは、巨大な古墳は埋葬者の権力の誇示であり、麓の人々の繁栄を見守る装置であると考えていたが、それだけではないと言う。

氏は「どこから見るか」という視点を提示された。同古墳の最高部は海面から40m近くもある。まさに網野に入港してくる海上から見るための仕掛けではないかと指摘される。同古墳造営期である4世紀末から5世紀前半にかけて、丹後半島はヤマト王権との関係や朝鮮半島との関係等から、外交政策がより重要な時期であった。氏によれば、網野は日本海交通の有力な港であり、かつては浅茂湖が存在し、銚子山古墳のすぐ下にまで広がっていたという。とすれば、海上からも目立つ銚子山古墳は、舟が浅茂湖に入るに従い、その巨大な姿の全容が迫ってくるようになっている。渡來した者にとって、度肝を抜かれるとともに、このクニが侮りがたいものに思え、畏怖する気持ちさえ持ったのではないか。氏のお話を伺いながら、かつての豊穰なこの地の繁栄ぶりが目に浮かんでくるように思えた。

(小寺慶昭記)

地名ウォーク

「山科本願寺跡」（11月8日審査）に参加して

山内 皇郎（本会理事）

山科本願寺は、浄土真宗中興の祖である蓮如上人により 1483（文明 15）年に完成し、約 50 年間にわたって存在した。だが今は地図を見ても寺の姿ははっきりと残っておらず全貌は明らかでない。それを探し突き止めるのが今回の地名ウォークである。

地下鉄東野駅を起点になだらかな坂道を西へ下り、手がかりになる場所を巡る。西本願寺山科別院、蓮加上人御廟所、中跡本願寺跡公園と土界、奥田邸

の屋敷と長屋門、西宗寺、山科中央公園グラウンドなど住宅街の中を順にたどっていくと、もはや何も残っていないように見えて寺の痕跡は点在している。

山科本願寺の全容は、御影堂・阿弥陀堂など寺の堂舎が建つ「御本寺」、法主や寺関係者の屋敷がある「内寺内」、職人や商人たち町衆が住む「外寺内」の3区画で構成されていた。全体の大きさは東西800m、南北1000mに及び、外周には土塁と濠をめぐらせ強固な防御を備えた城のような宗教都市であった。この地は京と東国を結ぶ街道筋に当たり、そばを流れる川には船着き場があったとの伝承があって舟運にも利用されたと伝わる。寺は約50年にわたって栄え「寺中広大無辺、莊嚴ただ仏国のごとし」と当時の公家の日記（『二水記』）には評されている。だが1532（天文元）年に京の日蓮宗信者である法華衆と近江の戦国大名六角氏の連合軍に攻められ陥落した。堅固な濠と土塁を誇ったにもかかわらず、土塁に設けた排水用の穴からの侵入を許したという。山科を追われた後は大坂に拠点を移して存続した。

意外なことに、陥落後の跡地は改変されることはなく長らく放置されていた。1889（明治22）年に発行された地形図では、土壠跡がいまだに残っていることが読み取れる。放置の理由は、この地が東から広がる扇状地の先端で、水を得にくく耕地に適さない土壤だからという。また庄屋を務めた奥田家が一帯の土地を所有・管理し続けてきたことも、土地の改変をまぬがれた一因とされる。奥田邸の門前には立派な長屋門が建ち、屋敷の北と西には今も土壠と濠跡がそのままの形で残っている。

1919（大正 8）年から日本絹布・鐘淵紡績がこの地に目を付け工場を建設し始めたことが、一帯の遺跡消失の始まりとなった。昭和 30 年代には国道 1 号線の東山バイパスと東海道新幹線の建設工事が始まり、さらに 50 年代に入って鐘紡工場跡地へ

の山科団地の建設など、大規模な開発を契機に発掘調査が進み山科本願寺の様子は少しずつ明らかになってきた。今後も新たな発見に期待したい。

今回は事前に京都新聞で告知したこともあって
参加者は 23 名にも上った。その中の松尾さんから
は、今では失われた遺跡や文化財の貴重な写真・資
料を見せていただいた。さらに快晴にも恵まれ、非
常に印象深い地名ウォークとなった。

A horizontal row of 20 empty star-shaped icons, each with a small circle in the center, used for rating or review purposes.

第66回 地名フォーラム 開催案内

日時 2026年1月25日（日）13:30～17:00

会場 龍谷大学大宮学舎 東鬱301

テーマ「上京区の歴史と町名」

に基づく4名の発表とセッション

セッションでは次の4名の本会理事の発表に続いて、発表者相互、発表者と来場者との間で感想や意見の交流を実施します。

第一部 13:30~15:05

(1) 中島 正 「上京区北縁の地名と古代寺院」

そもそも平安京内には東寺と西寺以外に寺院を造らないという原則が存在した。ただし、本格的な寺院とはいえない小規模な仏堂はこの規則に縛られない。左京四条三坊十六町の六角堂(頂法寺、中京区六角通東洞院西入堂之前町)も、もとは小規模な仏堂のみであったものが律令制の緩みに従って大型化したものである。また、貴族の邸宅内には自分が信仰する念持仏を祀る持仏堂もあった。

上京の地では、京外に平安京造営以前から出雲寺（上出雲寺、上御靈神社境内付近から相国寺にかけて所在）があり、延喜式七官大寺の一つ御靈寺に当たるとされる。さらに、上京・北区境には北野白梅町交差点付近に北野廃寺が存在した。これも京外ではあるが、京都御苑の西方一条大路の北に一条革堂（行願寺）があった。現在も革堂町・革堂中之町・革堂西町の地名が残り、「革聖」の異名を持つ僧・円が寛弘元年（1004）に創建したと伝える。元々は

遊行僧のささやかな草庵だったのであろう。

ここでは、平安京造営前後の寺院造営の様相について、上京北縁の地名を通して考えてみたい。

(2)岩田 貢 「上京区の昔の街と河川」

－市電がある風景・鴨川の付け替え？－

京都市電が京都の街から全て無くなったのは、昭和53（1978）年9月末のことであった。市電ファンならずとも残念な思いをしたものであるが、時代の変化に伴い、当時の記憶も薄れがちになってきた。前半では、上京区の昔の風景をみるのに、かつての公共の建物や戦後おかれた状況および市電があった頃の街の様子を、アラカルト風に写真で振り返る。

続けて上京区を流れる堀川と鴨川（賀茂川）についてみてみる。鴨川のY字型流路は、直線状でいかにも人工改変を受けたかのようである。これは、平安京建設前に旧賀茂川が上賀茂から堀川筋に流れ出していたものを、造営時に賀茂川→鴨川リレートに付け替えられた結果だ、という説が長く支持されていた。しかし、地下鉄工事に伴い京都盆地の地下の岩盤構造が明らかになるに伴い、異なる考え方が定説となってきた。後半ではその詳細について発表することにする。

(3)入江 成治 「街路名の由来について」

平安京創建以来、順次定着してきたといわれる京都の街路名の由来とその命名の経緯について、謎が多いにもかかわらず、現在では、考察の対象にされることも稀である。たとえば、烏丸通は、近代になって、いつから「る」が脱落して「からすま」になったのか。姉小路通がなぜ「あねがこうじ」ではなく、「あねやこうじ」と表記されるようになったのか、など枚挙に暇がない。ついには検証不能なテーマだとしても、仮説をたてて考察することが、地名研究に託された大切な役割であろう。街路名の由来

と町づくりの歴史は密接にかかわっている。そこで、今回は上京区を通る街路名と町名について、その歴史的経緯について考えてみたい。

（15分間 休憩）

第二部 15:20～16:30

(4)小寺 慶昭 「上京区の町名由来咄」

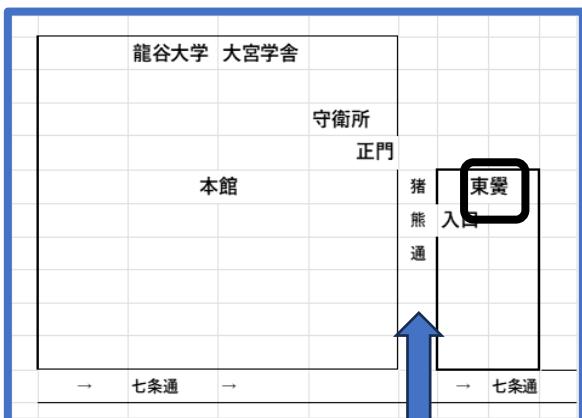
上京区597町の現在の町名は、その6割以上が既に寛永期（1624～44）には見られます。400年以上も継続しているということは、実に驚くべきことです。

また、由来についても、中・下京区と比べ、「寺社信仰由来」「屋敷・人名由来」「史跡由来」の町名が多いことが特徴と言えます。それらを紹介する中で、「門前でないのになぜ門前町？」「実相院は移転しているのに実相院町とは？」「亀木町と聚楽第との関係は？」等々の「町名の謎」を解き明かしつつ、町名命名の背後に見え隠れする京都人気質に迫りたいと思います。

16:30～17:00

発表者と来場者によるセッション

龍谷大学大宮学舎案内図



A horizontal row of 20 empty star-shaped checkboxes, each with a black outline and a white fill, intended for a rating scale.

歴史学と地名研究（第3回）

最古の地名 — 「漢委奴国王」印

沖村 由香 (本会理事)

A horizontal row of 20 empty star icons, each consisting of a five-pointed star shape with a small circle at the top center, intended for users to click and fill in.

江戸時代の天明年間、博多湾の志賀島で発見されたとされる金印があります。この金印は『後漢書』の記載により「光武帝が建武中元二年（57）に倭奴國に与えた印綬」に相当すると考えられています。

金印には「漢委奴国王」の五文字が篆書体で刻まれています。金印を所蔵する福岡市博物館のホームページには、

「かんのわのなのこくおう」と読みます。

と記されています（2025年11月17日現在）。

金印については真偽と印文の解釈をめぐって現在も論争が続いています。福岡市博物館が採用した上記の「読み」は仮説の一つですが、教科書にも採用された最も有名な仮説です。歴史学者の仁藤敦史氏が「「漢の委（倭）の奴国王」と彫られた金印」・「「漢倭奴国王」の称号」などとかなり大雑把な記述をされていることから見て、既に今日の歴史学界では、定説に近い位置づけにあることがわかります（佐藤信編『古代史講義【海外交流篇】』2023年、筑摩書房。19頁）。

さて、博物館ホームページの言う「読み」は、西暦57年頃の中国人（漢人）による音声の復元案ではなく、日本語の助詞を補った漢文訓読を意味しています。金印に用いられた漢字音は明らかになっておらず、漢人や倭人が「漢委奴国王」をどう発音したのかは謎に包まれています。金印が本物であれば、「委奴」は日本（倭）最古の地名（国名？）の記録となるため、これが当時どのように発音されていたのか、地名研究者ならずとも興味があるところでしょう。そこで、「委奴」については、八世紀の日本の史書を参考に読みが考案されました。

簡略的な説明となります、「委」については、

「倭」の減筆または省格と見て、「倭」の上古音 *uar*・中古音 *ua* を参考に「わ」と読むとしています。一方の「奴」の読みは『日本書紀』仲哀天皇八年条にみえる「儺県（なのあがた）」という地名を根拠とします。歴史学者は儺県なのあがたこそが金印の「奴」国にあたると見て、「奴」を「な」と読ませたのです。

しかし、金印と『日本書紀』には 700 年近い年代差があり、金印が造られた 57 年に「な（儻）」と呼ばれる地名が存在していたことを確認出来る資料は存在しません。これほど時代差が大きい日本の地名が、外国の金石文の考察に有効であると考える背景には、地名が不動不变であるという思い込みがあるようにみえます。京都の古地名「深草」は「フカウサ」「フコーサ」と発音されていた時期があったとされています。『風土記』の地名と現在の地名を比べても、読みが変化したと思われる地名は少なくありません。「委奴」の音声復元案は、定説ではなく仮説とみておくのが穩当ではないでしょうか。また、「かんのわのなのこくおう」には、日本漢字音（ひんじん）と漢字音の復元案（まき・な）が混在しています。つまり、統一した原則を持たずに同一金石文中の固有名を読んでいるということのようです。このような大雑把な読みが定説扱いされて許容されていることに、大変驚かされました。

A horizontal row of 20 empty star-shaped checkboxes, each with a black outline and a white fill, intended for a rating scale.

地名隨想① 芭蕉の発句と地名 連載 第10回

小寺 慶昭 (本会会長)

(13) 一茶は「景色の罪人」

一茶 29 歳の時、江戸から下総を廻り、故郷柏原に帰るまでの旅を『寛政三年紀行』としてまとめている。この中に「景色の罪人」という語が出てくる。

我たぐひひハ、目ありて狗にひとしく、耳ありて
も馬のごとく、初雪のおもしろき日も、悪いもの
が降とて誹り、時鳥のいさぎよき世も、かしまし
く鳴とて憎ミ、月につけ花につけ、たゞ従（徒）に

寝転ぶのミ。是あたら景色の罪人ともいふべし。

蓮の花虱を捨（む）るばかり也

王朝文化の伝統である花鳥風月の否定とも言うべき文章である。「罪人」の意味がはっきりしないが、風雅の美意識に背を向けていることを表しているのであろう。泥の中から花を咲かせる蓮の花でさえ、一茶にとっては蚤の捨て所なのである。もちろん、蚤の異名である「千手觀音」を効かせている。

一茶は「風雅」を全面否定したのではないと思えるが、少なくとも過去からの伝統にしがみつくことはしない。いきおい、「歌枕」も軽く扱ってしまう。俳枕でさえ、象潟の句に見られるように、パロディの対象でしかない。

これは一茶が偏屈だったからではない。時代のムードがそうなっていたからである。

明和2年（1765）、呉陵軒可有編『誹風柳多留初編』が刊行される。その後、毎年のように出されていく。世はこそって「うがち」と「みたて」と「もじり」のブームである。

大根引大根で道を教へけり 七番日記

道問えば一度に動く田植笠 誹風柳多留

こう並べてみると、俳句と川柳の境界線がなくなりつつあることがわかる。かえって、「田植笠」の句の方が俳句らしく見えてくる。

太平の世が続き、町人階層があらたな文化の担い手として登場する。人間性の肯定がテーマであり、享楽の方向に流れたりする。

この時代、日本人は自分たちを取り巻く景色の素晴らしさに無頓着になっていたような気がする。旅行ブームが起り、街道は旅人で満ちる。弥次郎も喜多八もその一人である。伊勢を詣り、京・大坂を見物し、金比羅さんに行き、善光寺まで足を延ばす。名所古跡をまわるが、新しい名所の発見ではなく、お仕着せの旅である。歌枕・俳枕としての地名は、観光地の看板に成り下がってしまう。

明治になり、外国人達が日本の美を発見する。日

本の山岳風景の素晴らしさも、来日の宣教師・ウェストンに教えられて「発見」する。同じことが、美術品でもさかんに行われる。

江戸末期、広重や北斎の風景画は人気があった。「〇〇百景」等の新しい景色の切り取りがあったのは事実である。しかし、それらが持つ本来の価値は、明治になってから「再発見」されたのであり、当時は消耗品扱いでしかなかった。北斎の「ビッグウェイブ」さえ、二束三文で海外に流失してしまった。

江戸の人々も自然との交流の中で生きていたが、身近すぎて、かえってその価値に気づけなかった。

明治になっての日本の美の再発見が、歌枕・俳枕の復活に繋がっていくと考えたい。一茶の時代は「忘れられていた」のである。

紙幅の関係で詳述はできないが、今一人の俳人、与謝蕪村（1716～84）の場合は、調査対象とした1445句中、地名句は195句であり、7.4句に一句の割合となる。畿内が圧倒的に多いが、大陸の中国の地名も12か所出てくる。いわゆる「歴史句」にも見られるように、写実性より、彼の頭の中で描かれた世界が文字化されているのが特徴であろう。

春の海終日のたりのたり哉（句稿屏風他）

月天心貧しき町を通りけり（句稿屏風）

さみだれや大河を前に家二軒（安永六年句稿）

先に東山魁夷の「道」でも触れたように、特定の場所で詠まれたとしても、画家の目からは一般化、普遍化した風景として描かれている。「春の海」の句など、『俳諧金花伝』では「須磨の浦にて」と前書きがあるが、かえってこの前書きがない方がよいと思われる。蕪村の秀句の多くが、特定の地名から離れた世界を創り出していると言えよう。ここでも「写実的な地名の世界」は軽んじられている。

A horizontal row of 20 empty star-shaped rating icons, used for user reviews.

地名隨想② 「紫野」 2説－色彩（全3回の1）

岩田 貢（本会理事）

A horizontal row of 20 empty star icons, each consisting of a five-pointed star shape with a small circle at each vertex.

「紫野」は私が好きな地名の一つである。いかにも京都らしい響きがある。また♪むらさき野べに♪の一節は、以前勤めた学校の校歌にあり、何度も口ずさんだ馴染み深い語句である。

この京都市北区の「紫野」については、天野太郎氏が吉田金彦・糸井通浩・綱本逸雄編『京都地名語源辞典』（東京堂出版、2013）中で、「紫」の由来は不明としつつ、染料となる紫草の植生に因る、村のサキ（先）にある位置に因るという2説を紹介されている。今回はこれらについて雑感を述べてみた

2. 紫色に見える野

この「紫野」の初見は、『類聚国史』延暦 14(795) 年 10 月朔日条の桓武天皇による「遊獵於紫野」である。和銅 6(713) 年に「好字二字化令」が出されたことは知られている。その 82 年後に「紫野」という表記がみられるのである。これから「紫」は同 会以降の地名表記とみてよいだろう。

「野」が付く地名を巡っては、糸井通浩氏が「これから地名研究－私の課題－」（京都地名研究会『地名探求』第21号、2023）の中で、「『野』の複合語では『地名+野』となるものが典型をなし」と記されている。

そこで「紫」に着目すれば、①“紫色に見える野”と②“紫色が見える野”とが想定できる。

まず①“紫色に見える野”については、万葉集卷1-20の額田王「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」の歌が思い浮かぶ。元の表記は、「天皇遊獵蒲生野時額田王作歌」として「茜草指武良前野逝標野行野守者不見哉君之袖布流(奈良県立万葉文化館HP)」とある。「武良前」は、各

種文学全集においては「紫草」と読まれ、「薬草や染料となる紫草が生えていたから」という解釈がなされている。

私は、これから歌の現場となった蒲生野が、さぞかし紫色一面にみえたであろうと勝手に想像していた。加えて、先の桓武天皇による「遊獵於紫野」も、額田王の歌にある「ムラサキ（紫）」が当然影響しているとみるのが普通であり、「紫野」は“紫色に見える野”であったに違いないとも。

3. 「紫草」について

前田雨城氏『ものと人間の文化史 38・色 染と色彩』（法政大学出版局、1980）によれば、「紫草は奈良時代ごろまでは、相当自生していたとみられる。『万葉集』にも『むらさき』の名がよくみられる。（略）むらさき草の栽培は、平安時代に既になされている。」とある。そして、「“ムラサキ”は、夏に白い小さい花が咲く。紫根と呼ばれる根が、紫色の染料や生薬に利用されてきて、古代から自生種が採取されてきた。（要約）」とも記す。

万葉集には「紀曰、天皇七年丁卯夏五月五日縱獵於蒲生野」とある。これに関して、平凡社『日本歴史地名大系 25 滋賀県の地名』には、「『五月五日』と記すように、古代中国の端午の行事で、男は薬用の動物を狩猟し、女は薬草を摘むという風習 = 獵猟であった」としている。

採取していたのは、確かにむらさき草であろう。先述した「紫草」から得られる色彩イメージとは異なる。これでは、白い花が咲く野ではないか。

因みに、歌の舞台の蒲生野があったとされる東近江市「万葉の森船岡山公園」には、当該の遊猟を描いた巨大陶板画がみられる。ここには遊猟の場面として、乗馬して狩りをする高貴な男性の姿と、白い薬草を探る同様の女性とが描かれている。ただ、女性は根を掘り起こさず花を摘んでいるようにみえ、紫根を採取する作業とは異なる。芸術的表現であろう。

紫野にもどう。元々の紫野の地形は、左大文字がある大文字山の東山麓で船岡山の北側に位置し、おおむね標高 80m の南北等高線上を辿る、大徳寺通りを東の境とする東下がりの緩斜面である。その東側にある賀茂川沿いの氾濫原とは異なり、小高く水利上で田圃には不向きなところである。

延暦 14 (795) 年 10 月朔日条の桓武天皇による紫野における遊獵は、初夏に行う薬獵とは異なり、鷹狩りで鳥獣を追える環境の場で展開されたと考えられる。したがって、紫野における奈良後期・平安初期の植生を考えれば「ムラサキ」が自生していた可能性はあるが、大方は雑木林のような地域であったのだろう。紫色の花の咲くことによる“紫色に見えた野”とは異なると思われるのである。

●○受贈図書及び資料紹介●○

ご寄贈に感謝します。

『熊本乃地名』 第 287~289 号

熊本地名研究会

会報の送付方法について

先号でもお知らせしましたが、本紙を郵送で受け取ることをご希望の方で、ご回答がまだの方は、先号に同封したハガキか、次の電子メールアドレス宛に送信してください。

(1)「ご氏名」(2)「携帯電話番号」(3)「メールアドレス」を必ず記入してください。

送信先 kyotochimei@gmail.com

ハガキの回答欄に必要事項を記入し、**85 円切手を貼つて投函してください。**

お手元にない場合は、郵便ハガキでもけっこうです。

〆切 1 月 31 日までにお願いします

京都地名研究会への入会案内

千年の都、京都。ここを起点として近畿から国の内外に及び地名を広く細かく蒐集し、比較調査して、地名を学ぶ学会です。地名は歴史の鏡であり、文化を盛る器です。私たちの暮らしのもとにある地名に目を向けて、日本の文化と歴史認識をいっそう深め、地域の知的活性化に役立ちたいと念じます。年齢、職業などの如何を問わず、いつでも、どなたでも、地名文化に関心をもたれる方々のご参加を歓迎し、ご協力もお願いします。入会金不要。

詳細はホームページをご覧ください。

年会費 3000 円

賛助会員・理事 5000 円

家族会員 1000 円

お問い合わせ先

京都地名研究会事務局 入江 成治

Tel 090-6916-6837

E-mail : kyotochimei@gmail.com

会費納入先 口座名 ゆうちょ銀行

加入者名 : 京都地名研究会

口座記号番号 : 00910-1-160705

本会ホームページアドレス

<https://kyotochimei.wixsite.com/kyotochimei>

